

2017年度 第2回「デジタル公民館まっさき」活動 10月活動報告

2017年10月3日(火)

1.活動スタッフ参加者

参加者:3名(内訳)			
男性	3名	アソシエイト層(~34歳)	0名
女性	0名	リーダー層(35~59歳)	0名
		シニア層(60歳~)	3名

2.活動日時

2017年10月3日(火) 13:30~16:30

3.活動場所

ハネウエル居場所ハウス

岩手県大船渡市末崎町字平林 54-1 TEL : 0192-47-4049

4.活動について

今回のデジタル公民館まっさき活動は、末崎町からの要請により「居場所ハウス」の運営のあり方の見直しについて、意見交換会を実施しました。

5.意見交換会で出された意見

●持続可能な活動に向けた考え方

- ・建物があるから苦労しているのであれば、やったら儲かるものをやらないと、箱物として維持できない。
- ・活動を持続するためには、お金の入りと出を、運営に関わる全員が共有しておかないといけない。
- ・ボランティアを中心として活用するのは、持続可能性を考えると難しい。
- ・居場所ハウスから、仕事場ハウス、商売場所ハウスということを考えてみる。
- ・コミュニティ再生のためには、住んでいる自分たちが生き生きと頑張れることが大事
- ・「居場所ハウス」は、ぼ~っと行って、コーヒーを飲む場所じゃなくてもいい。

●運営に携わっているメンバーの意識

- ・関わっているメンバーの意識として、「居場所ハウス」が無くなると自分は困るという当事者意識、切実感を持っている人を作る必要がある。一般的な話として、大きな組織になればなるほど、そうした当事者意識、切実感を持つのが難しくなる。

- ・地元の人が協力して色んな事業をやっているのはすごいと思うと同時に、そんなに頑張って疲れてしまわないか？ と心配しながら見ていた。

●末崎町内の人との関係

- ・末崎町内で幅広い世代を対象とする活動を考えた方がよい。
- ・居場所っこクラブで夏休みの宿題をされたのはよいことだし、それが冬休み、春休みと広がっていくとよい。

●共に担うという考え方

- ・霞が関ナレッジスクエアでは「共に考え、共に学び、共に担う社会へ」をテーマにしている。サービスを受けるだけじゃなくて、共に担い手になってもらう。提供する人はしんどい思いをしてサービスを提供しているのに、それを受ける人は「楽しかった」で、終わっていないか。
- ・全員に参加してもらい、役割を担ってもらう。それが、次ここを運営する人を作ることになる。

●公民館との関係

- ・本来、公民館（ふるさとセンター）で行うべき事業まで、代わりにやろうとしているので赤字になるのではないか。公民館でやるべきことは公民館に任せざるべきではないか。これをやったら赤字だろうと思われることを、「居場所ハウス」でやる必要はない。そうすると活動は継続できない。
- ・公民館（ふるさとセンター）と「居場所ハウス」という、似たような場所が2つあることで、住民の使いやすさが2倍になっていけばよい。しかし、打ち消しあって競合しているなら、公民館を十分に活用できていないことにもなる。

●末崎町外の人との関係

- ・末崎町の内部では8理念を徹底すると同時に、末崎町の外の人からはいかにお金を取ることができるかを考えた方がいい。
- ・長洞元気村では、支援会員として2万円の年会費をもらっており、支援会員には年4回、地元の特産品を送っている。
- ・企業に2万円の寄付をもらうのは大変なので、個人から2万円で支援会員になってもらい、その代わりに、年に何回か末崎の特産品を送る仕組みを作るのはどうか。「居場所ハウス」の支援会員のようなもの。
- ・地域外からの訪問は「いつでも」にこだわらず予約制、有料にしてはどうか。それをホームページに掲載しておくといよい。予約制であれば特別な料理を作ることもできる。
- ・末崎町出身で、今は離れた地域で暮らしている人は、支援会員になってくれる。
- ・今でも震災の時の話を聞きたいという人は多い。
- ・地方紙（東海新報）やマスコミを上手く活用すれば、地域外から人を呼ぶこともできる。

●末崎町の魅力を活かす

- ・目指すべき姿を実現するためには、自主財源がないとダメ。

そのために末崎町の魅力、文化をいかにして活かせるかを考える。

- ・長洞元気村では、都会から来た人にワカメの芯抜きをしてもらい、体験料として1人1,500~2,000円の体験料を取っている。
- ・修学旅行にきている中学生を「居場所ハウス」に連れてきても、現状では「居場所ハウス」で何が経験できるかがわからない。美味しいコーヒーが飲めたでは、都会と同じ。例えば、震災の時の話が聞ける、ワカメ養殖の話の聞いたりビデオを見たりできる、末崎中学生のワカメ養殖体験のビデオが見られる、碁石研究の成果のビデオが見られるなど、「居場所ハウス」で体験できる末崎らしいことがあれば、修学旅行にきている中学生を連れてくることもできる。

●食堂

- ・食堂のメニューを見ると、東京のレストラン見たい。ボランティアにきた大学生に聞くと、ばあちゃんの手作りの料理が食べたいと話していた。都会から来た人が一番喜ぶのは、サンマのすり身汁。
- ・食堂のメニューにはカレーとか都会でも食べられるものを載せるのではなく、おちづき、ひつつみなど、これまで「お楽しみランチ」で作ってきたメニューの一覧を載せておけば、「今日のメニューは何か？」という楽しみにもなる。
- ・月曜、金曜に魚屋さんがきているので、その日の魚を使ったお刺身定食を出すのはどうか。

●情報発信・情報共有について

- ・運営に関わっているメンバーが、メーリングリスト（一斉メール）でつながることは大事
- ・毎月発行されている「公民館報（館報まっさき）」の一面に、「居場所ハウス」のコーナーをもうけることはできないか？

以上

田中 康裕氏(Ibashi Japan 副理事)記録より抜粋